

古事記を読む会 30号 (2017,6,4)

うす緑の紫陽花が上がってきました。季節の移ろいに驚くこの頃です。

今回は、服部先生に「常世の国から持ち帰ったもの」をテーマにお話しいただきました。提案資料には「常世国を訪れた神・人」と題し、①少彦名神、②山彦の海神の国訪問、③田道間守、④御毛沼命、⑤管川の水江浦嶋子をあげられました。配布参考資料として、「屈原の詩」、「万葉集にみる橘の例」、「浦島伝説の比較」、「風土記 逸文 丹後国 筒川の嶋子」「万葉集にみる水江の浦島の子」、「文部省唱歌・田道間守の歌」と、多岐に亘った内容です。



あまり討論がなかったのですが、帰って『古事記』を読み直し、上つ巻の最後の文に、④御毛沼命の段を印象深く読みました。服部先生がその専門分野の植物について、教えて下さったこと、日本の橘と中国の橘とは違うこと、田道間守が持ち帰ったのは、本当は何だったのか？ 橘（タチバナ）は日本原産 コミカン、中国の橘は、ヤマトタチバナではない→唐橘。済州島には、異種のコウライタチバナがある。カラタチは、ミカン属に近縁の唐橘が訛った物である。漢方薬の原料となる。御所にあるタチバナは、植物的には何か？ はてなが続く。

○中国に於いても日本でも、橘が愛され讃えられた。

楚辞 橘頌 屈原 では、「天命のまま遷らず、根は固くして移し難く、その志はただひとすじ……。」「胸はひろく他に求めず 世に目覚めて独立し はばからず しかも乱れぬ ……」日本では万葉集に 常葉の木として愛でられている。多くの歌を紹介し、田道守の長歌より、神様の時代から橘を時じくの香具の樹の実と名をつけたに違いない。そして、橘を讃えている。

垂仁天皇（第11代）は、田道間守を常世国に派遣し、非時香果（ときじくのかくのこのみ）を求めさせた。天皇は卷向の宮で崩御され、翌年、非時香果を持ち田道間守が帰ってきた。しかし、天皇が崩御されたことを聞いて、泣き悲しみ、殉死する。垂仁天皇陵の濠に浮かぶ田道間守の墓をしみじみ眺める。すると、古墳は、常世ではないか？と思った。

何しろ、資料に紹介されたことが多く、読みこなしていない。服部先生には、橘の原種を戸田に訪ねられるとのこと。どうぞ、今回も補説をお願いします。

そして、田道間守について、皆さんからの質問や意見をいただきたいと思います。

もし、時間が余るようであれば、素環頭鉄刀について少しお話しさせていただきます。

今後の予定

7月2日 確認

9月3日 藤田先生の第2回目

「久米歌と三輪の大物主」

以降の提案希望者募集!! 10月1日、11月5日、12月3日